

St. Luke's International University Repository

ヘルス・ボランティア活動をしている看護学生の学習ニーズと学習支援のあり方

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 香春, 知永, 田代, 順子, 及川, 郁子, Kaharu, Chie, Tashiro, Junko, Oikawa, Ikuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00014935

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



— 原 著 —

ヘルス・ボランティア活動をしている 看護学生の学習ニーズと学習支援のあり方

香 春 知 永¹⁾, 田 代 順 子¹⁾, 及 川 郁 子¹⁾, 小 澤 道 子¹⁾
平 林 優 子¹⁾, 菱 沼 典 子¹⁾, 酒 井 昌 子¹⁾, 宮 崎 道 紀 枝¹⁾
三 橋 恭 子²⁾, 森 明 子¹⁾

要 旨

看護学生が地域社会の人々とパートナーシップを形成し、地域における看護職の貢献について学ぶことは看護教育において重要であり、このような学びの機会となるヘルス・ボランティア活動を促進するための学習支援プログラムの開発が求められている。

本研究は、実際に活動を行っている看護学生にその経験と、ボランティア活動を通して看護学生が必要であると認識する学習支援ニーズを記述し、ヘルス・ボランティア活動を促進するための学習支援のあり方を検討することを目的としている。研究協力者は、公募に応じたボランティア活動経験者14名であった。研究方法は、インタビューガイドを用いて面接を実施し、得た情報を逐語録にして内容分析を行った。なお、本研究の計画書は、聖路加看護大学研究倫理審査委員会で承認を得た。

看護学生は、ボランティア活動に対する自己の関心を動機とし、さまざまな情報をきっかけとして活動に参加し、活動を通して人々や地域への理解を深め、自らの職業への意欲を高め、活動に対する責任、ボランティア活動のあり方を学んでいた。このような活動に必要なとされる知識・技術・態度については、社会性を含めた対人関係能力、具体的活動で必要とされる対象理解、生活行動を中心とした援助技術、チームにおけるメンバーシップ能力をあげていた。これらの内容について、自己学習、仲間やボランティアの受け手である家族や組織から学んでいた。以上の結果から、ボランティア活動を促進し、学びとするため方策として、ヘルス・ボランティア活動へのアクセスを容易にする「情報提供支援」とボランティアの考え方や必要とされる能力のオリエンテーションおよびボランティア活動の学びの意識化のための「ヘルス・ボランティアガイドプログラム」の2つの方策が考えられた。

キーワード

ヘルス・ボランティア活動, 看護学生, 学習ニーズ, 学習支援

I. はじめに

少子高齢化や他者との関係性の希薄さなど社会の諸状況の変化に伴い、日本では生涯学習も視野に入れた教育改革として社会参加や社会貢献が推奨されている。ボランティア活動は、「公共」を支える人間へと成長するための基盤であるとして積極的に教育のなかに取り入れられ、活動のための環境整備の必要性がいわれている¹⁾²⁾。このようななかで、ボランティア活動と教育との融合した教育方法に関して、「サービス・ラーニング (Service Learning)」が米国の大学改革策として普及し、日本においても導入され始めている。米国の看護教育における

「サービス・ラーニング」の教育効果については、地域でのヘルスプログラムを通じたサービスの実践を学習内容として、専門的知識・技術、コミュニケーション技術の向上や、地域のニーズや課題を見出すことなどの学習成果が報告されている。このような成果は、看護の社会ニーズを把握し、パートナーシップを形成する看護職者を育成する看護学生への教育プログラムとしての「サービス・ラーニング」の可能性を示唆している³⁾。

日本の看護教育においてボランティア活動は、障害児や障害者の理解の方法として実習や演習に取り入れられ、対象理解の知識・情緒的側面から理解の深まりが学習成果として報告⁴⁾⁵⁾されている。一方、課外活動としてのヘルス・ボランティア活動から看護学生は、活動への責任感、地域社会への身近さの認識、自己の能力が活かされ自分に還元されるといった多様な成果⁶⁾を得ていた。これらは、看護学生が地域社会にある人々とパートナー

受付日2005年2月7日 受理日2005年5月14日

1) 聖路加看護大学

2) 前聖路加看護大学

シップを形成し、地域社会における看護職の貢献を学習するうえで重要な学びであるといえる。ヘルス・ボランティア活動を通して看護学生は健康・医療領域の課題に取り組み、その活動過程のなかで、健康な市民として地域貢献が可能であると考えられる。このようなヘルス・ボランティア活動を看護教育の場として意義あるものにしていくため、具体的な学習支援システムの検討が急務であると考えた。

なお、本研究で用いるヘルス・ボランティアとは、地域、社会でのボランティア活動の一領域であり、健康・医療領域のニーズに応える自主的活動をいう。

II. 研究目的

本研究は、ヘルス・ボランティア活動を推進するための学習支援プログラムを開発するために、ヘルス・ボランティア活動を行っている看護学生の経験から学習ニーズを明らかにしてプログラム内容を検討することを目的とした。本研究の目標は次のとおりである。①看護大学生のヘルス・ボランティア活動の経験を記述する。②看護大学生が考えるヘルス・ボランティア活動推進のため必要とされる知識・技術・態度、学習ニーズおよび学習教材・学習方法を記述する。③看護大学生の学習ニーズに基づくヘルス・ボランティア支援プログラム試案に向けた要素を抽出する。

III. 研究方法

本研究は、質的・記述的研究である。

1. 研究対象

ヘルス・ボランティア経験のある看護学生で「ヘルス・ボランティア研究の協力」の公募に応じ、研究の趣旨に同意して、研究協力承諾書に署名をした学生とした。

2. 調査方法

調査は、「参加動機やきっかけ」「ボランティア活動での経験」「ボランティア活動での学びと困難」などを内容とした、研究者らが作成したインタビューガイドに沿った半構成的面接法で行った。面接は各協力者に1回行い、研究協力者の承諾のもとテープに録音し、研究者は面接中、前述の事項に関してフィールド・ノートに記録した。面接終了後、面接で得られた情報内容を研究対象者に確認のうえ、概要を要約ノートにまとめた。調査期間は2003年12月から2004年3月であった。

3. 分析方法

テープは逐語録とし、次の手続きで内容分析を行った。①フィールド・ノートおよび要約ノートを参考に、個々の学生の逐語録の内容分析を行い、「学生のヘルス・ボ

ランティア活動の参加動機・きっかけ」「ボランティア活動での経験・学び」「ヘルス・ボランティアとして必要とされた能力」と「その学習方法・資源」を抽出して、ケースごとに分類して一覧表にして概観できるようにした。②複数の研究者で、それぞれの分析項目ごとに、再度全ケースの逐語録から該当する内容を抽出してカテゴリー化を行った。③抽出された内容およびカテゴリーを全研究者間で確認を行い、妥当性を高めるようにした。

IV. 倫理的配慮

研究計画書は、聖路加看護大学研究倫理審査委員会で審議され承認を得た。倫理的配慮としては次のとおりであった。研究対象者は、研究目的、研究協力内容、協力に要する時間、調査の進め方、協力謝礼を明示した揭示物による公募とした。研究協力志望の学生には、「研究協力をお願い」を渡し、同時に口頭説明を行ったうえで、研究協力の意思を研究承諾書に署名してもらうことで確認をした。その際、所属教育機関のカリキュラムでの学習とは一切無関係であり、所属教育機関の評価対象ではなく、自主的参加であること、研究協力の途中辞退の権利があること、情報の匿名性、データの保管および処理方法、研究成果の公表についても説明を行った。

V. 結果

1. 研究協力者

研究協力者は、看護系大学の1年生から4年生の13名および大学院修士課程学生1名の計14名であった。具体的なボランティア活動は、筋萎縮性側索硬化症(amyotrophic lateral sclerosis; ALS)患者や筋ジストロフィー患者の在宅ケアボランティア4名、一般病棟やホスピスなどの病院ボランティア2名、障害者や高齢者の施設でのボランティア3名、病院、施設にいるあるいはサマーキャンプなど子どもを対象としたボランティア6名、地域活動ボランティアなどで、個人が複数の種類のボランティア活動に取り組んでいた。

2. 分析結果

1) ヘルス・ボランティア活動の動機・きっかけ

ヘルス・ボランティア活動への動機やきっかけは、9つのカテゴリーに分類できた。看護に近い現場に身をおきたい、将来の職業のため、すでにもっている資格を活かすなどの「自己研鑽」、大学入学以前からもっていた「ボランティアへの関心」、時間に余裕ができて「有効に時間を使いたい」という思い、自らの入院や病気体験といった「患者体験」のような動機があがった。

一方、ボランティアに関する本、施設見学、授業、ボランティア募集の掲示など「本、見学」や「募集掲載」

などのボランティア活動に関する情報に触れたこと、すでにボランティア活動を行っている<友人・知人からの紹介や依頼>、入院中の高齢者や海外で<出会った人からの影響>といった人的影響やこれまでの教育課程(中学や大学)で実施してきた<ボランティア活動の体験>など外的なきっかけによってボランティア活動に参加をしていた。学生は自分自身の関心からの動機とその動機を行動へと導く外的影響要因のきっかけの両方について語っていた。

2) ヘルス・ボランティア活動による学び

ヘルス・ボランティア活動を通して、さまざま状況・場にある人々とのかかわりを通した学び、活動を通して社会とかかわることによる自分の考え方の変化や看護に関連する学び、ボランティア活動そのものに関する学びを得ていた(表1)。

ボランティア活動を通した人々とのかかわりによって、人々の生き方、思い、考えを知り、対象となる人・家族への理解や人のつながりの大切さなど<人々への理解の深まり>を学び、出会いの楽しみや、かかわりを通して生を考えることの楽しみ、子どもや障害者との自然なかかわりのうれしさという<人とかかわることの楽しみ>を学びとして捉えていた。

また、在宅、施設などさまざまな場や対象者のおかれている状況のなかで活動することで、現実を知ること、自分の考え方が表面的であったことへの気づき、相手の生活や健康を通して自分の生活や健康の考え方が変化したことへの気づきなど<さまざまな事柄に対する考え方の変化>という学びを経験していた。

ボランティア活動という社会活動による責任感の意識化、視野の広がり、子どもや障害者とのかかわりを通したコミュニケーション能力の向上といった<自らの成長>を意識する内容、大学での学びの深まり、看護技術の向上、看護への関心の深まり、進路決定に役立つことなど<将来の職業(看護)に役立つ>学び、さらに対象者を取り巻く地域社会のあり様から社会の仕組みに対する理解、地域の潜在的ニーズの気づき、福祉のあり方の考えなど<地域社会への理解の深まり>を学んでいた。

さらにボランティア活動を体験することで、ボランティアそのものについて、活動のやり方、活動の難しさ、活動が相互作用であること、ボランティアが自己犠牲でないこと、時間やお金の余裕が必要なことなど改めて<ボランティアに対する考え方>を深めていた。

3) ヘルス・ボランティア活動で必要とされた能力

(1) 必要とされた能力(表2)

ボランティア活動を行うにあたり学生が必要であると捉えた能力で最も多くあがったのは<対人関係のための能力>であった。これは、ALS患者、子ども、高齢者など対象特性に応じたコミュニケーション技術、人とかかわりの基本でもある礼儀、挨拶といった社会的マナー、ボランティアメンバー間や他職種などとの関係を円滑に

表1 ボランティア活動による学び カテゴリー一覽

<人々への理解の深まり>	さまざまな年齢の人々の生き方・思い・考え方を知る 本人・家族への理解が深まる 人と人のつながりの大切さ 心理面を理解し支援することの大切さ
<人とかかわることの楽しみ>	人との出会いの楽しみ 人の生を考える楽しみ 子どもが苦手でなくなること 障害者への自然なかかわり 関心のあることをする楽しみ
<さまざまな事柄に対する考え方の変化>	物事の捉え方が表面的であったことに気づいた 人や現実を知ろうと思った 健康・生活についての考え方の変化(その人なりの生活・健康の大切さ) 考えの幅の広がり 差別について考える機会となった 時間の大切さを感じた
<自らの成長>	責任感の芽生え 視野が広がり成長 コミュニケーション能力の向上
<将来の職業(看護)に役立つ>	看護技術が向上した 大学での学びが深まる 進路を決めるために役立つ 看護への関心を深めた 組織運営の仕方を学んだ 人のために役立ちたいという気持ちが強まった
<地域社会への理解の深まり>	社会の仕組みにたいする理解 地域のなかの潜在的ニーズへの気づき 高齢者を通した地域の理解 福祉社会について考えるようになった
<ボランティアに対する考え方>	ボランティア活動のやり方 ボランティアの難しさやシステム化の必要性 ボランティア活動が相互作用であること ボランティアが自己犠牲ではないこと ボランティアは自分に余裕(時間・お金)が必要なこと ボランティアが必要とする知識や技術

< > カテゴリー名

していくための協調性などであった。また、ボランティア活動を行う対象や場の理解、対象の健康問題に関する専門的知識の理解といった<対象・状況理解のための能力>があげられた。

個々のボランティア活動を実施するための能力として、生活の援助を行う在宅ケアなどでは、<直接的ケアのための能力>があげられた。また、活動内容に関する理解、

表2 ボランティア活動に必要とされた能力

＜対人関係のための能力＞
コミュニケーション能力, 社会的マナー, 協調性など
＜対象・状況理解のための能力＞
対象理解, ニーズや状況の理解, 対象に関する専門的知識など
＜ボランティア活動運用のための能力＞
活動内容・期待の理解, 活動のための仲間づくり, 地域の人たちとの連携のとり方など
＜直接的ケアのための能力＞
移動・清潔・食事など生活行動援助のための技術, 吸引などの処置
＜ボランティア活動のための姿勢＞
体力, 相手への関心, やる気, 動機の見極めなど

＜ ＞カテゴリー名

仲間作り, 連携のとり方など<ボランティア活動運用のための能力>があげられた。

また, ボランティア活動を行う前提となる個々人がもつボランティア活動に対する動機, やる気や関心, 感謝の気持ちや優しさ, 体力・自己の健康管理といった<ボランティア活動のための姿勢>が必要であるとの意見があった。

(2)領域別で必要とされた能力

ヘルス・ボランティア活動の支援内容をさらに検討するため, さらに活動の領域別にケースを分類し詳細に分析した結果, 表3に示すとおりとなった。

各領域に共通する内容としては「対象理解, アセスメントに関する技術」「コミュニケーション技術」があげられ, 在宅ケアや病院内ボランティアなど健康問題をもつ対象や場でのボランティア活動では, 「安全」「生活行

表3 ボランティア活動領域別にみた必要とされた能力

	ALS/在宅ケア : 5ケース	小児対象 : 6ケース	障害者施設 : 3ケース	病院ボランティア : 2ケース	地域ボランティア : 1ケース
対象理解 アセスメント力	・ALSの病態 (1)	・障害児の特徴 (2) ・入院している子どもの特徴 (1) ・子どもの生活 (1) ・遊び方 (3) ・子どもの理解(成長発達)やアセスメント力 (4)	・障害者の特徴 (1) ・相手を理解するためのアセスメント技術 (1)	・情報収集力 (1)	・地域のアセスメント力 (1)
コミュニケーション	・コミュニケーション技術 (4)		・コミュニケーション技術 (2)	・コミュニケーション技術 (2)	・人間関係, 交流の技術 (1)
安全	・感染予防 (1) ・安全 (1)	・感染予防 (1) ・事故防止 (1)			
医学的 処置	・人工呼吸器の関する技術・看護 (2) ・吸引 (5) ・経管栄養について (1) ・バイタルサインの見方 (2)				
生活行動 援助技術	・モーニングケア (2) ・清拭 (1) ・食事介助 (2) ・ベッドの整え方 (1) ・体位変換・身体支持の仕方 (2) ・日常生活行動の支援方法 (1) ・車椅子の扱い, 移動の仕方 (2) ・外出への援助 (1)	・抱っこ, おむつ交換, 哺乳, 食事介助 (1)	・介助方法 (1) ・車椅子の使い方 (2)	・身体支持の仕方, 身の回りの世話の知識と技術 (1)	
家族との かかわり	・家族の理解と関係の持ち方 (3)	・母親, 家族との接し方 (1) ・子どもを亡くした母親の喪失体験 (1)			
メンバー シップ	・他職種(ヘルパー, 訪問看護師など)のなかでの自分の役割・責任 (2)	・病院スタッフとの関係 (1)			・チーム活動としてのメンバーシップ (1)
その他	・夜間急変時の対処 (1) ・夜間のあり方 (1) ・24時間の付き添い方 (1)	・子どものパニックへの対処 (1)	・対象の行動のコントロール方法 (1)		・グループ化の技術 (1) ・情報交換や情報管理技術 (1)

() 件数

動援助技術」「家族とのかかわり」「メンバーシップ」があげられた。

領域の特徴としては、在宅ケアでは、吸引を代表とする「医療処置の技術」や「夜間の付き添いのあり方」があげられた。また子どもを対象とするボランティアの場合「遊び」が、地域活動では「グループ活動の技術」が特徴であった。

4) 必要とされた能力の学習方法および資源

ボランティア活動を行うにあたり必要とされた能力の学習方法や資源は表4に示すとおりであった。専門家、家族、仲間といった他者から学ぶ方法と自己学習による方法とがあげられた。

ボランティア受け入れ機関などの「公的オリエンテーションや研修」の期間は、1～3日間とさまざまで、講義だけでなく在宅ケアでは技術研修が組まれているものもあった。＜家族やボランティア施設の専門家からの指導＞は活動場面でされており、特に在宅ケアでは学生は家族からのその対象者に適した手技の指導を受けていた。＜先輩からの指導や仲間との相談＞によって技術、社会性も学び、また＜ボランティア仲間との情報交換＞によってボランティア活動を円滑にするよう工夫をしていた。個々の具体的な活動に関しては、その活動を行っている場にいる人々やボランティア仲間を資源として、その個別の状況で必要とされることを体験のなかから学んでいた。日常生活の援助技術や吸引など処置技術、疾患の知識、キャンプでの遊びなどは、施設やボランティア組織で作成したマニュアル、本、インターネット、大学の教材ビデオなどを活用し＜自己学習＞を行って不足している知識・技術を学んでいた。

このようなボランティア活動を円滑に、また支えていくために、「ボランティア活動を行うかどうか、自分に適しているかどうか、自分の期待にあっているかどうかを判断するための個々のボランティア活動に関する情報がほしい」「ボランティア活動を支えるための組織や、学びを深めるため活動を振り返る機会があるとよい」「技術習得のための実用教材があるとよい」といった、ボランティア活動を適切に選択するための情報提供支援、活動を継続するため活動の振り返りや活動の意義について話し合うための場の提供、具体的技術習得のための資

表4 学習方法や資源

＜ボランティア施設などの公的オリエンテーション・研修 (8)＞
＜家族・ボランティア施設の専門家からの指導 (6)＞
＜先輩からの指導や仲間との相談 (6)＞
＜自己学習 (6)＞
＜ボランティア仲間での情報交換 (5)＞
＜教員との相談 (3)＞

< >分類名, ()件数

源などの提案もあげられた。

VI. 考察

学習ニーズに基づくヘルス・ボランティア活動を促進するための学習支援のあり方について、面接内容の結果から2つの点が考えられた。

1. ヘルス・ボランティア活動の情報提供支援

ヘルス・ボランティア活動を促進するための要因として、ボランティア活動にかかわる情報提供の重要性が考えられる。看護学生の多くは自らの専門領域の関心の高さから看護を体験する場に参加する意欲が高い。このような意欲・関心をもちつつ、ボランティア募集の掲示、友人や知人からの紹介、講義や施設見学などから情報を得ることが、ボランティア活動を行うきっかけとなっていた。身近にこのようなボランティア活動の情報が存在することが、看護学生の関心を行動へ移すための準備として必要だと考える。また、情報内容としてボランティア活動の目標やボランティアへの期待を提示することは、学生自身が何のためにボランティア活動に参加するのか自己の動機の見極めに役立ち、このことは活動の継続につながると考えられる。

2. ヘルス・ボランティアガイドのあり方

ヘルス・ボランティア活動を行うため必要とされた能力を学ぶ機会と、ボランティア活動を通じた自己の学びを得る機会の提供は、ボランティア活動の推進に役立つと考えられる。これらの内容を検討し、表5のようなボランティア活動の過程に応じたボランティアガイドを提案として作成した。

1) ヘルス・ボランティア準備(出会い)プログラム

学生がヘルス・ボランティア活動をする心の準備と活動を円滑に導入するために知っておくべき情報や知識を提供するプログラムである。内容は、「ボランティア活動とは何か」というボランティア活動の考え方や、活動の基本姿勢である「自己の関心、やる気という意欲の意識化」「ボランティア活動に参加するための時間・健康の自己管理の重要性」「社会的マナー」「協調性」「責任」さらに活動に関連する情報・資源の情報提供を含めた。特に、ボランティア活動は社会のなかで、ボランティアの対象者を取り巻く家族、多種多様な職種の人々、またボランティア仲間との協働で行われるため、対人関係と活動への役割遂行への責任は重要であると考えられる。

今回の面接結果からは、ボランティア活動で必要とされる危険回避、危機対応といった緊急事態への心構え、ボランティア保険の必要性や相手のプライバシーの厳守⁷⁾に関してはあがらなかった。これは、ヘルス・ボランティア活動ということで、活動を行っている場が医療施設であること、周囲に専門家が存在していることや、

看護学生という特性から対象のプライバシーへの配慮が学習されていることなどが影響しているとも考えられる。一方で、ボランティア対象の急変時などの対応に対して不安を抱いており、健康や健康問題を専門領域として学習している看護学生にとって、緊急事態に関するオリエンテーションは準備プログラムで重要な内容であると考えられる。

2) ヘルス・ボランティア活動を始めるためのプログラム

ヘルス・ボランティア活動を具体的に実施していくうえで必要とされる内容に関して、共通技術と領域別技術の2段階で構成した。共通技術としてほとんどの領域であげられていた「対象理解、アセスメントに関する技術」「コミュニケーション技術」「安全」「生活行動援助技術」「家族とのかかわり」「メンバーシップ」を含めた。成長発達の特徴をふまえた「対象理解」、ノンバーバルコミュニケーション技術を中心とした「コミュニケーション技術」、身体の支持や体位変換、車椅子の扱い方などの「生活行動援助技術」は、障害者やALS患者、施設内の子ども、病院患者へのヘルス・ボランティア活動においては、対象と関係を構築し、期待される活動内容に不

可欠と思われる。

領域別としては、ALS患者の在宅ケア、子ども、病院、情報提供活動を中心とした地域ケアがあげられた。特に、在宅ケアでは、吸引を代表とする「医療処置の技術」や「夜間の付き添いのあり方」がある。ALS患者の在宅ケアのボランティアでは、家族の代行という立場でのボランティア活動の期待のなかに吸引技術があり、家族にとっては将来医療職者となる看護学生ということ期待が大きく、また学生自身は看護技術を体験したいという希望が一致している状況になっていると思われる。しかし、看護学生は無資格者であるということとふまえると吸引などの医療処置技術に関してどのようなオリエンテーションを行うかは課題である。

3) ボランティア相互支援プログラム

ボランティア活動で必要とされた能力を学ぶ方法や資源としてボランティア仲間との相談や情報交換をあげていた学生が多かった。ボランティア活動において参加者同士が話し合うこと自体が、個々の活動の支援になっていると考えられる。また、自分の体験を他者に語ることで得られるボランティア活動の意味づけや学びは、活動継続のための一助となると考える。このようなボランティ

表5 ヘルス・ボランティアガイドプログラム開発に向けた指針案

ガイドプログラム名	プログラムの内容
I. ヘルス・ボランティア準備（出会い）プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動とは何か ・ボランティア活動のための基本姿勢 動機の確認：やる気、関心 社会的マナー 他者との協調性 責任 時間や健康の自己管理 危険回避・危機対応 ・情報や助言のための資源紹介
II. ヘルス・ボランティア活動をはじめるためのプログラム	
1. 共通知識と技術	<ul style="list-style-type: none"> ・成長発達をふまえた対象の理解 ・安全のための技術 ・コミュニケーション技術 ・生活行動援助—移動、食事介助、身体の支持や体位変換 ・家族とのかかわり ・メンバーシップ
2. 領域別知識と技術	
2-1. 在宅ケア	<ul style="list-style-type: none"> ・病態の理解 ・医療処置の法的意味と技術 ・夜間の対応
2-2. 子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・障害児の理解 ・遊びについて
2-3. 地域情報提供	<ul style="list-style-type: none"> ・地域アセスメント ・グループ活動の技術
III. ボランティア相互支援プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動での体験や出来事の交換 ・ボランティア活動で学んだことの振り返り

アに参加する人々が相互支援していくための場を設けるためのプログラムが必要であると考えた。

組織化されていないボランティア活動や学習として意味づけることを目的としていない組織では、個々の学生のボランティア活動の体験を振り返る機会が意図的には行われていない。ボランティア活動で体験したことを振り返ることは、個人の行為や思いを言語化し、さらに体験した事象に関して過去の経験や知識を活用して意味づけを行う自己省察 (reflection) の機会となる。自己省察はサービス・ラーニングの学習方法として取り入れられており、ボランティア活動や地域活動が学習となるために不可欠な要素とされている⁸⁾。ボランティア活動で困ったこと、面白かったこと、活動のコツ、嬉しかったことなどさまざまな体験を他者と共有する場合は、情報交換を通したボランティア活動での課題解決や活動の工夫を検討する場となる。同時に、自己の体験を語る場でもあり、自己の体験に意味づけができ経験へと進化させる学びをもたらす、活動継続を動機づけることになると考えられる。

ボランティアに関心をもっている学生が、安心して活動にアクセスしやすいように窓口としての情報提供支援と、ボランティア活動を快適に、また活動過程での自らの主体的学習を支援するためのガイダンスを提供することは、学生のボランティア活動を促進することにつながると考えられる。

今回の調査結果から抽出されたガイダンスの内容をどのように展開していくか、ボランティアが“自発的な自由意志”を特性とする⁹⁾という点をふまえ、大学における位置づけ、時期、担当者など具体的なプログラム化やその展開の妥当性の評価は今後の課題と考えられる。

VII. おわりに

ヘルス・ボランティア活動を行っている看護学生は、その活動から人々や地域に対する理解、看護職への意欲を深めていた。また、学生は活動を通して、ヘルス・ボランティア活動を円滑に行うために必要な要素として情報提供のあり方、ボランティア活動に対する動機の見極め、対人関係、直接的ケア、活動の意味づけをする場などをあげていた。これらをふまえヘルス・ボランティア活動を推進する方策として、情報提供支援およびボランティア活動全般で必要とされる内容、健康・医療領域で

必要とされる対象理解と直接的ケアの内容、ボランティア活動の共有と学びという構成のボランティアガイド指針が考えられた。看護教育において、看護職として地域の健康ニーズを身近に捉え自己の能力を活かすような実践的教育的アプローチの可能性を探るために、今回の調査で試案されたボランティアガイド指針をより具体的に展開し評価していくことが今後の課題である。

本研究は、平成 15, 16 年度科学研究費助成金により行った。

引用文献

- 1) 生涯学習審議会, 学習の成果を幅広く生かすー生涯学習の成果を生かすための方策について (答申書), 24-33, 1999 年 6 月 9 日.
- 2) 中央教育審議会, 青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について (答申), 2002 年 7 月 29 日.
- 3) 松谷美和子他, 看護教育法としての「サービス・ラーニング」: 実践研究文献レビュー, 聖路加看護大学紀要, 30, 31-38, 2004.
- 4) 岩田みどり, 看護教育とボランティア (第二報)ー看護学生の体験報告から障害理解の構造を分析して, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 11, 23-29, 1998.
- 5) 三瓶まり他, ボランティア体験が学生にもたらす教育効果 (I), 鳥取大学医療技術短期大学部紀要, 32 号, 27-34, 2000.
- 6) 三橋恭子他, ヘルス・ボランティア指向のある看護大学生の『身近な健康問題とケア』の認識とボランティア経験, 聖路加看護学会誌, 8(1), 36-42, 2004.
- 7) (財) 内外学生センター, わかる・みつかる・できる 学生のためのボランティアガイド, 64-66, (財) 内外学生センター, 1999.
- 8) Mueller, C., Norton, B., Service Learning Developing values and social responsibility, In Billings, D.M., Halstead, J.A., Teaching in nursing A guide for faculty 2nd, 222, ELSEVIER. SAUNDERS, 2004.
- 9) 大阪ボランティア協会, ボランティア 参加する福祉, 24-26, ミネルヴァ書房, 1981.

Development of a Support System Based on Nursing Students' Learning Needs for Health Volunteer Activities

Chie Kaharu, Junko Tashiro, Ikuko Oikawa, Michiko Ozawa, Yuko Hirabayashi
Michiko Hishinuma, Masako Sakai, Toshie Miyazaki, Akiko Mori
(St. Luke's College of Nursing)
Yasuko Mitsuhashi
(Former faculty member, St. Luke's College of Nursing)

In nursing education, an important issue is for nursing students to learn how to establish partnerships with people in the community and with community based nursing services, as well as develop a sense of civic responsibility. Volunteer activities in health or medical fields provide learning opportunities, so as educators, we need to develop learning supports to encourage students' health volunteer activities.

The purpose of this study was two-fold: ① to describe nursing students' experiences of volunteer activities and their learning needs that supported their volunteer work and ② to discuss a schema for promoting health volunteer activities. Fourteen nursing students who were working as volunteers gave their consent to participate. They were interviewed using an interview guide with open-ended questions. The interviews were audio taped and transcripts were analyzed using content analysis. The Institutional review Board of St. Luke's College of Nursing granted approval of this study.

Results indicated that nursing students worked as volunteers motivated by their interests in health volunteer activities taking advantage of information around them. They developed: an understanding of community health needs, motivation to be nurses, and responsibilities to volunteers through their activities. They identified competencies needed for health volunteer activities: interpersonal relationships including social manner, understanding of clients, technical or professional skills, and membership. They learned these competencies by themselves, through peer interaction, or from the clients/ families. We conclude that we need two plans to facilitate nursing students' volunteer activities. First is an information support plan to easily access volunteer activities. The second is a learning support plan including a health volunteer guide program, incorporating orientations to volunteer activities and needed competencies, and reflections about volunteer experiences.

Key Words

health volunteer activities, nursing students, learning needs, learning supports